

山梨県下の小・中学校における器楽教育に関する調査

Instrumental Music Pedagogy in Compulsory Education in Yamanashi Prefecture

小島 千か
Chika KOJIMA

I 調査の目的と概要

1. 目的

山梨県下の小・中学校の音楽授業における器楽の活動状況を明らかにすることを目的としている。この調査は、2009年9月に実施した調査（有本 他, 2010）に伴って、山梨県下の全公立小・中学校の音楽科担当教員を対象として実施したものである。

2. 概要

〈調査時期〉2009年9月

〈調査対象〉山梨県の公立小・中学校の音楽科担当教員

〈調査方法〉学校宛の郵送による質問紙調査。記入は1名に依頼し、音楽科担当教員が複数の場合、できるだけ担当者間で相談の上記入していただくようお願いした。

〈回収率〉

小学校 200 / 96校 = 48.0%

中学校 93 / 32校 = 34.4%

表 I-1 回答者の所属する学校の規模（校数）

学級数	小学校	中学校
1～5	8	14
6～8	45	4
9～11	10	5
12～14	5	5
15～17	18	2
18～20	5	1
21～23	2	0
24～26	2	0
27～35	0	0
36	0	1
無回答	1	0
合計	96	32

表 I-2 回答者の教職経験年数（非常勤等の年数を含む）

経験年数	小学校		中学校	
	人数	%	人数	%
5年以下	5	5.2	6	18.8
6～10年	16	16.7	5	15.6
11～15年	8	8.3	3	9.4
16～20年	21	21.9	1	3.1
21～25年	30	31.3	7	21.9
26年以上	16	16.7	10	31.3

表 I-3 回答者の内訳

職務	小学校		中学校	
	人数	%	人数	%
音楽専科	2	2.1	0	0.0
教科主任	85	88.5	30	93.8
管理職	2	2.1	0	0.0
その他	7	7.3	2	6.3

3. 調査項目

問1は、学校備品の楽器とその活用を問うた。楽器については表 II-1 の通りで、該当欄に所有台数の記入と、授業内で活用していれば○印の記入を求めた。中学校では授業内活用を必修と選択のそれぞれで問うた。また、この他に授業内で活用している楽器を挙げるよう求めた。

問2は、児童・生徒個人に持たせている楽器について、選択肢による回答を求めた。小・中共通の選択肢は、「鍵盤ハーモニカ、ソプラノリコーダー、アルトリコーダー、その他（楽器名を記入）、持たせていない」で、小学校はこれに「ハーモニカ、カスタネット」を加えた。

問3は、音楽科全体の年間授業時数を100%として、そのうち器楽にどの程度の時間を配分しているかを選択肢によって回答するものである。選択肢は、「ほとんどない」から「50%以上」まで5%きざ

みの11段階とし、学年ごとに選択を求めた。なお、「学年ごと」の回答には、小学校の場合6学年分の記入欄を、中学校では3学年分と「選択・音楽」の4つの記入欄を設けた。これは以下問8まではほぼ同様である(問6と問8の小学校が多少異なる)。

問4では、器楽のうち多く取り組む活動内容を問うた。6項目(中学校は5項目)の選択肢を示し、各学年2項目の選択記載を求めた。選択肢の詳細は表II-3にある通りである。

問5は、授業の中で原則として毎時間継続して取り入れている器楽の活動について尋ねた。「リコーダーの練習曲5分間」という例を示し、学年ごとに記述欄を設けた。

問6では、和楽器の実技を授業に取り入れているか尋ねた。取り入れていれば、楽器名および教材や活動内容などを、取り入れていなければ「なし」と学年ごとに記述するよう求めた。小学校は、毎学年取り入れているとは限らないと考え、3学年分の欄を用意し、取り入れている学年も含めて記入していただいた。

問7では、電子系の楽器を授業に取り入れているか尋ねた。問6と同様に、取り入れていれば、楽器名および教材や活動内容などを、取り入れていなければ「なし」と学年ごとに記述するよう求めた。小学校では「アンサンブルオルガンで旋律と和音を合奏」という例を示した。

問8は、器楽の活動で効果的だと感じられる教材を問うた。小学校では「低・中・高学年」の区分で、中学校では学年ごとに「教材」欄と「理由」欄を設けて記載できるようにした。

問9は、器楽の指導を行う際に感じる困難や問題点について、楽器、授業時数、歌唱との時間配分、個人差、読譜に関する5つの選択肢(表II-5)を設け、複数回答可で選択を求めた。さらに、広めの記述欄を設け、自由な意見を求めた。

問10では、器楽の授業を展開するにあたって、今後取り組みたいこと、今後どのようになっていくことが望ましいかなどの展望を自由記述で記載していただいた。

問11は、教員経験が10年以上の先生のみに対する質問である。器楽の指導について、10年以上前と比べて変化したと考えられることを自由記述していただいた。

II 各設問の回答結果

問1 学校備品の楽器とその活用

小学校の鍵盤楽器と打楽器は、アンサンブルオルガンやドラムセットの例外はあるものの、所有率、活用率共に高い。一方、和楽器は、大太鼓(鉦打太鼓)が所有率も活用率も5割を越えている他は、全体的に所有率、活用率共に低い。

中学校は、アンサンブルオルガンや低音オルガンを所有している学校が少なく、鍵盤楽器の活用率は全体的に低い。打楽器は小学校よりは少ないものの、比較的多くの学校で所有しているが、活用率が低い。その理由として考えられるのが、所有台数である。木琴は、小学校では1台しか所有していない学校は0%であったのに対し、中学校では所有している学校中の40.7%が1台のみの所有である。同様に鉄琴では、小学校は所有している学校中の10.4%であるのに対し、中学校は65.4%が1台しか所有していない。ギ

表II-1 学校備品楽器の所有率と活用率

楽器名	小学校		中学校	
	所有率(%)	活用率(%)	所有率(%)	活用率(%)
アンサンブルオルガン	39.6	71.1	15.6	40.0
シンセサイザー	68.8	66.7	50.0	37.5
オルガン	90.6	77.0	62.5	30.0
低音オルガン	50.0	75.0	0.0	0.0
木琴	100.0	92.7	84.4	22.2
鉄琴	100.0	87.5	81.3	19.2
大太鼓	99.0	86.3	81.3	15.4
小太鼓	99.0	86.3	75.0	8.3
シンバル	100.0	80.2	71.9	8.7
ドラムセット	21.9	28.6	68.8	9.1
ギター	—	—	78.1	36.0
箏	12.5	25.0	96.9	96.8
三味線	3.1	0.0	53.1	76.5
尺八	5.2	20.0	25.0	12.5
大太鼓(鉦打太鼓)	55.2	62.3	37.5	16.7
締太鼓	27.1	46.2	12.5	25.0
当たり鉦	5.2	20.0	12.5	25.0

ターは所有率が高い割にあまり活用されていない。一方、和楽器は、特に箏の所有率、活用率の高さが目立つ。所有数は、所有している学校中の90.3%が3面以上所有している。次に三味線も比較的多く所有、活用されている。しかし、それ以外の和楽器は所有率も活用率も低い。

選択肢以外の楽器については、小学校では55.2%の記載があり、ラテン系打楽器を書いている学校が多かった。中学校での記載は34.4%と減り、各種リコーダー、タンブリン等の小打楽器等が書かれていた。小規模校ではエレキギター、トランペットやサクソ等の管楽器の記載もあった。

問2 個人所有の楽器

小学校では、鍵盤ハーモニカ（ホースのみ個人持ちにさせている3校含む）とソプラノリコーダーの個人所有の割合が非常に高い。つまりほとんどの学校が両方の楽器を個人所有させており、それにカスタネットを加えた3種を持たせている学校は33.3%あった。中学校では、楽器を個人所有させていない学校が約半数である。

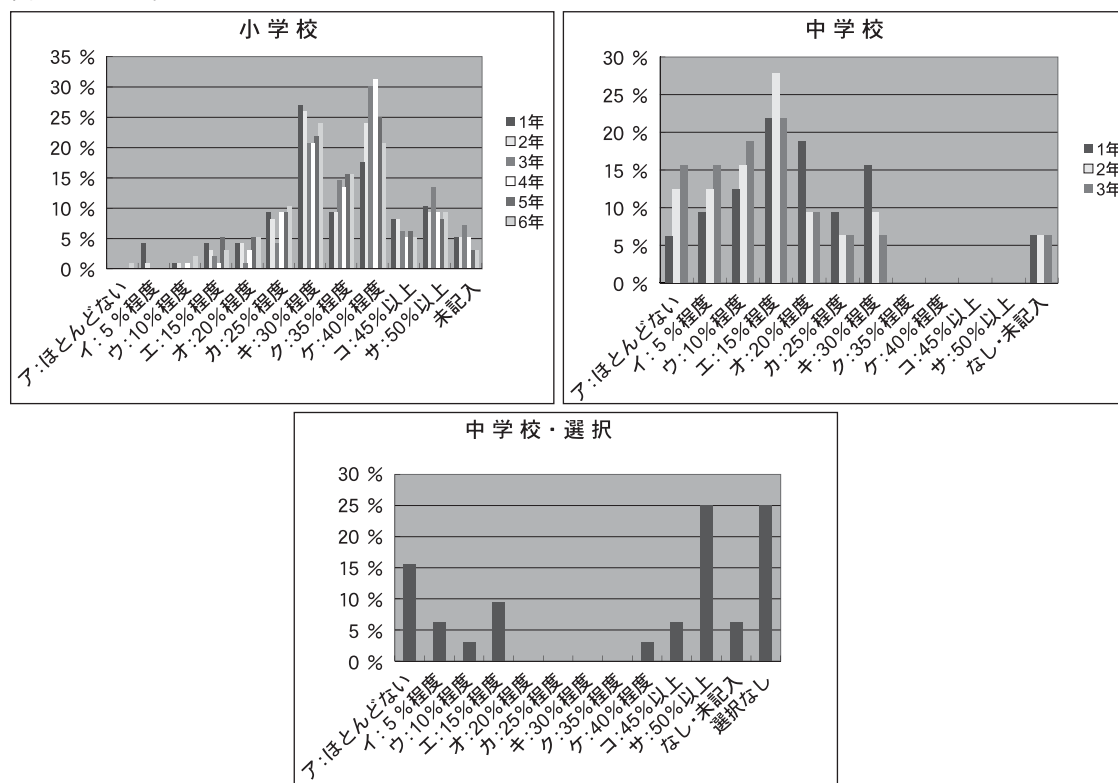
表Ⅱ-2 個人所有の楽器(%)

	小学校	中学校
1. 鍵盤ハーモニカ	95.8	0.0
2. ハーモニカ	1.0	—
3. カスタネット	37.5	—
4. ソプラノリコーダー	99.0	25.0
5. アルトリコーダー	3.1	28.1
6. その他	0.0	0.0
7. 持たせていない	0.0	46.9
未記入	0.0	6.3

問3 音楽科の指導内容における器楽の配分

器楽活動への配分について、音楽科の授業時間のうち25%以上かけている学校は、小学校では、1年生82.3%、2年生85.4%、3年生89.6%、4年生89.6%、5年生86.5%、6年生85.4%と全学年で8割以上であった。一方、中学校で25%以上かけている学校は、1年生25.0%、2年生15.6%、3年生12.5%で、小学校に比べて極端に少なかった。つまり中学校では器楽活動の時間が20%以下の学

図Ⅱ-1 器楽への時間配分



校が7～8割（1年生で68.8%、2年生78.1%、3年生81.3%）になることが明らかとなった。

中学校の選択授業では、その主な活動内容が器楽であるかどうかで分かれるため、「ほとんどない」と「50%以上の時間をかける」にほぼ二極化する傾向がみられた。

問4 器楽で多く取り組む活動

小学校では、多く取り組まれている活動が学年で異なる。「単一楽器で、同じリズムや旋律を一斉に合わせる活動」と「楽器と歌の合奏」は低学年の方が多く学年が上学年になるにつれ減少する（「楽器と歌の合奏」の4年生は例外）。「単一楽器で2パート以上のリズムや旋律を合わせる活動」は3年生から、「二種類以上の楽器による学級全員の合奏」は2年生から多くなる。これら4つの活動は、クラス全体での一斉授業が可能であるのに対して、残りの2つはグループ活動である。「単一楽器によるグループアンサンブル」と「複数楽器によるグループアンサンブル」は高学年で多くなる。

中学校では、「単一楽器で、同じリズムや旋律を一斉に合わせる活動」と「単一楽器で2パート以上のリズムや旋律を合わせる活動」は全学年を通して4割程度取り組まれている。1年生の「単一楽器で、同じリズムや旋律を一斉に合わせる活動」だけは8割弱と高い割合である。「二種類以上の楽器による学級全員の合奏」と「単一楽器によるグループアンサンブル」は、2割前後で、「複数楽器によるグループアンサンブル」は極端に少ない。ここで小学6年生と中学1年生を比較して、その割合に大きな違いのある部分に着目してみたい。「単一楽器で、同じリズムや旋律を一斉に合わせる活動」は小学校6年で24.0%であったのに対し、中学1年で78.1%である。「二種類以上の楽器による学級全員の合奏」は、6年生では51.0%、中学1年で18.8%、「複数楽器によるグループアンサンブル」は6年生では31.3%、

中学1年で0%である。ここから明らかになったことは、複数の楽器を

表Ⅱ-3 多く取り組む活動における各項目の選択率

活動内容/学年	小学校						中学校		
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
単一楽器で、同じリズムや旋律を一斉に合わせる活動	90.6	78.1	63.5	36.5	26.0	24.0	78.1	46.9	37.5
単一楽器で、2パート以上のリズムや旋律を合わせる活動	20.8	30.2	50.0	55.2	52.1	47.9	40.6	46.9	40.6
二種類以上の楽器による学級全員の合奏	21.9	42.7	35.4	49.0	50.0	51.0	18.8	15.6	21.9
楽器と歌の合奏	39.6	29.2	21.9	29.2	19.8	14.6	—	—	—
単一楽器によるグループアンサンブル	2.1	1.0	8.3	7.3	19.8	24.0	25.0	25.0	25.0
複数楽器によるグループアンサンブル	4.2	3.1	5.2	11.5	25.0	31.3	0.0	3.1	6.3
未記入	20.8	15.6	15.6	11.5	7.3	7.3	34.4	62.5	68.8

※各校に上位2項目の選択を求めた結果

※中学校には「器楽と歌の合奏」の選択肢は含まれていないが、中学1年に「歌とリコーダー」という記述の回答あり

使う合奏やアンサンブルの活動は、中学1年になると極端に減り、単一楽器で一斉に合わせる活動が多くなるということである。それには、問1で示された、打楽器があまり活用されていないことや、問3で明らかになった器楽活動の配分が20%以下の中学校が7～8割であることと関連していると考えられる。選択授業では、未記入が多くあまり器楽の活動が行われていないが、「複数楽器によるグループアンサンブル」が選択授業を実施している学校中の43.8%、「単一楽器によるグループアンサンブル」が31.3%（いずれも上位2項目の選択を求めた結果）であった。

問5 授業で継続して取り上げる器楽の活動

小学校で何らかの継続的活動を取り入れている割合は1年生31.3%、2年生32.3%、3年生66.7%、4年生53.1%、5年生41.7%、6年生38.5%である。多くの学校でリコーダー指導が始められる3年生において高い割合となった。そして、18.8%の学校が鍵盤ハーモニカを1、2年生、27.1%の学校がリコーダーを3年生から6年生の4年間継続して用いている。学年によって楽器は異なるが、6年間継続的活動を取り入れている学校は12.5%である。そのうちの66.7%は児童数15名～88名の小規模校である。

中学校では、1年生で、12.5%、2、3年生で9.4%の学校で行われており、内容はアルトリコーダー、ソプラノリコーダーの練習、シンセサイザーの合奏である。3年間通して継続的活動を取り入れている学校は9.4%である。選択授業では、選択授業を実施している学校のうちの33.3%が行っており、その内容は、ギター、箏、三味線、様々な楽器の合奏等である。

問6 和楽器の実技

小学校では46.9%の学校が授業に取り入れていた。取り入れている楽器は和太鼓が最も多く、和楽器実技を取り入れている学校のうちの88.9%である。その他箏が17.8%、尺八が4.4%取り入れられていた。学年では5年生が最も多く、取り入れている学校のうちの62.2%で、4年生が40.0%、6年生が37.8%、3年生が13.3%と続いた。1、2年生ではほとんど取り入れられていない。活動内容は「おはやしづくり・ふしづくり・創作」が一番多く22.2%あった。その他は「民謡」「地域の音楽」「日本の音楽」「《さくらさくら》の演奏」「音を出してみる」等の回答があった。

中学校では、96.9%の学校(32校中31校)で和楽器が取り入れられていた。残りの1校は、生徒が地域の伝統芸能に係わっているため、楽器の購入がないとのことである。3年間何らかの和楽器を用いている学校は22.6%である。多く用いられている楽器は箏であるが、上学年になるにつれ少なくなり、その代わりに全体的な割合としては少ないが、三味線が増えている。活動内容は、箏では「《さくらさくら》の演奏」が全学年を通して圧倒的に多い。三味線は「歌舞伎の鑑賞と関連づけた活動」という回答が多かった。

表Ⅱ-4 和楽器に用いている楽器(%) (複数回答)
中学校

楽器/学年・選択	1年	2年	3年	選択
箏	71.9	46.9	18.8	41.7
三味線	6.3	12.5	18.8	20.8
和太鼓	6.3	3.1	6.3	8.3
篠笛	0.0	0.0	3.1	0.0
なし・未記入	18.8	43.8	65.6	54.2

問7 電子楽器の活用

小学校では46.9%の学校が授業に取り入れていた。アンサンブルオルガン、電子オルガン、シンセサイザー、キーボード、ベースオルガン等が用いられており、活動内容は「電子楽器を組み入れた合奏」や「旋律と和音の合奏」という回答が多かった。これらの回答は全学年にあったが、4年生以上で多くなり、電子楽器を取り入れている学校のうち4年生で37.8%、5年生で51.1%、6年生で53.3%である。その他、5、6年生には、「和音を弾く」等の和音の学習に関するものがあり、5年生で13.3%である。

中学校ではほとんど用いられていない。必修授業で9.4%、選択授業で12.5%の学校で用いられていた。必修授業での内容には、「小規模校で全校音楽として全員でシンセサイザーの合奏を行っている」「小グループの活動でキーボードを用いている」「和音の学習でキーボードを使用」があった。選択授業では、「シンセサイザーを合奏やアンサンブルの音色の充実に用いる」「エレキギター・ベースやシンセサイザーを用いてビッグバンドを行っている」等があった。

問8 器楽の活動で効果的と感じる教材

小学校でこの欄のどこかの学年に何らかの記載があった学校は54.2%である。低学年において効果的な教材として挙げられたものとして多かった上位を示すと《かえるのうた》《こいぬのマーチ》《どんぐりさんのおうち》《ばすばすはしれ》である。理由としては、「音階、タンギング、ポジション移動等の学習に良い」「楽しい」「簡単」「よく知られている」等が挙げられていた。中学年では『笛星人』《茶色の小びん》《オーラリー》が上位3つの教材である。『笛星人』はリコーダーのテキストで、「リコーダーの導入に良い」「細かいステップでリコーダー技能が習得できるよう系統的に練習曲が編まれて、少ない音でも満足できる」「楽しい」「ノリが良い」「運指が楽」などが理由に書かれていた。その他の曲で

は、「打楽器のアレンジができ、リコーダーと合わせ聴き映えがする」が示されていた。高学年では、《キリマンジャロ》が一番多く、その理由としては「取り組みやすい」「様々な楽器の組み合わせを工夫できる」「リズムアレンジができる」等である。その他《木星》や《威風堂々》はメロディーの美しさが、《コンドルは飛んで行く》では、「難しいが達成感がある」「打楽器のアレンジができ、リコーダーと合わせ聴き映えがする」等の理由で挙げられていた。どの学年にも共通することは、取り組みやすいことと楽しさである。中学年以上では、何らかのアレンジができたり、メロディーの美しさや聴き映えなど、より音楽的な内容が挙げられていた。

中学校でこの欄のどこかの学年に何らかの記載があった学校は31.3%である。「授業時数も少ないためあまり時間をかけることができないので、特に良いと思われる教材もない」との回答もあった。「ヴィヴァルディの《春》の鑑賞と関連させてリコーダー演奏を行う」というものだけ複数回答があった。あとは、「工夫できる」「達成感がある」という視点から教材が挙げられていた。「取り組みやすい、比較的容易に演奏できる」ということでアルトリコーダーや和太鼓が挙げられていた。

問9 器楽の指導にあたって感じる困難や問題

5つの選択肢のうち3項目以上を該当とする回答は、小学校では24.0%、中学校は31.3%であった。

小学校では、5つの選択肢のうち、「児童の技能の個人差が大きい」を該当とする回答が多かった。続いて、「音楽科の総授業時数が少ない」と「楽譜を読めない児童が多い」に対する割合が多い。自由記述でもそれら3点に関わるものが多かった。「個人差が大きく、高学年になるとなかなか合わせるのに時間がかかってしまう。また、音楽科の授業数も少ないため、うまく演奏できない子、楽譜の読めない子に時間をとることができず、合奏を楽しむまでにいけないことがある」に代表されるように、個人差、時数、読譜の3点は関連しており、高学年になるに連れてスパイラルに問題点が増幅しているようである。個人差に関しては、「教師1人で対応していくのは難しい」「休み時間に指導することもある」「休み時間や放課後の時間が行事、会議等で（練習時間を）確保できない」「技術が向上しない児童の意欲の低下」等も挙げられていた。また「演奏を楽しんだり味わったりするには、ある程度の技術が伴わなくてはならないが、十分に技能を高めるだけの時間がない」のように、授業時数が少ないために技能や基礎的内容を習得させるのが困難であるという意見も多かった。その他、「合奏において様々な楽器のパート練習を1人で指導すること」「楽器の準備やメンテナンスに時間がとられる」「グループ別指導の場所や時間が十分でない」「学年で同じ時間に音楽をしていて楽器使用の時数が少なくなる」「音楽室が狭い」「良い楽器で良い音を体験させたく備品要求を出すのが通らない」等様々な困難や問題点が挙げられていた。

中学校では、「総授業時数が少ない」の選択が多かった。それに対する自由記述では、「1つの内容を充分時間をかけて表現したり、感受する気持ちを育てることがむずかしい」「好きになるまでいけない」「『よろこび』を経験するにはほど遠く『さわらせる』のが精一杯」など、時間をかけた積み重ねによる成果が期待できない状況が浮き彫りになった。その他、「1人1台ないと指導は難しい」「生徒のやる気のある・無しの差が大きく全体の雰囲気に影響する」「箏の調弦等、楽器の準備に時間がかかる」「教師自身の専門性を高める時間が欲しい」「合唱コンクール等の行事とタイアップするため時間がとられる」等が挙げられた。

表Ⅱ-5 器楽指導に感じる困難や問題(%)

	小学校	中学校
1. 備品(楽器)の種類や数が少ない	25.0	62.5
2. 音楽科の総授業時数が少ない	54.2	78.1
3. 歌唱に時間をとられる	3.1	28.1
4. 児童の技能に個人差が大きい	77.1	40.6
5. 楽譜を読めない児童が多い	39.6	21.9

問 10 今後についての考え・展望

小学校では、合奏に関する記述が多くあった。それらは「時間かけて取り組みたい」や「多くの回数を行いたい」というものである。その他、「音楽専科教員の配置や複数教員による指導が可能となるような教員の加配が必要」「児童のレベルに応じて使用できるように難易度の異なる様々な教材・子ども達の意欲を喚起できるような教材の収集」「学校内・外での音楽発表の場の設定」「生演奏を聴く機会」「基礎的活動の充実」「和楽器やラテン楽器など多様な楽器の導入」「専門家による指導」等の記述があった。

中学校では、「創作活動と関連づけた授業」「授業時数の増加」「ある時期に集中して器楽の時間のまとめどりをする」「生徒の好みやレベルに合った教材が豊富にあること」「技術科の協力のもと自作篠笛で演奏する」等があった。

問 11 10年以上前と比較しての変化

小学校では、時数の削減に伴って「合奏の機会が減少した」「大曲に取り組みづらくなった」という意見が多くあった。その他、「電子楽器が増えた」「和楽器への関心の高まり」「ピアノ等習っている子が増える一方、音楽嫌い・苦手な子も増え技術面での二極化」「リズムアレンジする活動が多くなった」「奏法のための指導でなく『感受』や『鑑賞』も含め活動を仕組むことが求められるようになった」等があった。

中学校では「時数が減りとてもやっつけられない」と書かれた回答があったが、中学校音楽科の器楽教育が厳しい状況はこれまでの様々な回答結果の数字に表れていた。そして、多くの記述があったのが「アルトリコーダーをする時間が減少した」「アルトリコーダーを持たせられなくなった」である。時数の削減と和楽器実技の必修が入ったため、アルトリコーダーを継続的に行えず、そのような中で経済的な問題もあり保護者の理解を得るのが難しいようである。これは全国調査でも同様であった。

III 結果からの考察

今回の調査から、小学校では様々な困難や問題はあっても、比較的多くの時間が器楽活動に充てられ、問 9、10、11 の自由記述全てにおいて、合奏に関する事が多く記載されていた。一方、中学校では備品楽器が少なく、個人で楽器を持たせることも難しく、授業時数が少ない上に合唱に時間が取られるなど多くの理由から、器楽合奏やアンサンブル活動は風前の灯のようである。唯一和楽器の指導だけが残っていると看做しても過言ではないような状況もみられる。全国調査の中学校においては「継続的活動と広く浅くの 2 本立て」「眠っている楽器の活用」という視点で考察した(小島, 2010, p. 58)。ここでは小・中学校の関連も視野に入れて「合奏やアンサンブルの充実」「和楽器の実技の取り入れ方」「工夫に関する問題」「教材」の 4 つの視点から考察する。自由記述の内容から考えさせられる部分が多かったため、原文のまま出来る限り多く取り上げながら考察したい。その場合には引用後の括弧内に小・中の別、主任・専科・その他の別(主・専・他と略)、教職経験年数(5 年以下は 5 下、26 年以上は 26 上、その他は該当区分の数字)を記す。

1. 合奏やアンサンブルの充実

小学校調査においては、問 10 では、合奏の活動にじっくり取り組んで楽しさを味わわせたいと考えている意見が多かった。問 5 の多く取り組む活動でも、「二種類以上の楽器による学級全員の合奏」は 2 年生から増加し、6 年生では全ての活動の中で一番多く取り組まれていることが示された。アンサンブル活動も高学年になると増える傾向になった。しかし問 9 では、少ない授業時数の中で個人差に対応しながら 1 人で合奏指導を行うことの困難さが示され、問 11 の 10 年以上前との比較では、時数の削減に伴い器楽合奏の機会が減ったという記述が多くあった。個人差や時数削減の問題がある中で、合奏や

アンサンブルをこれまで以上に充実させて行くには、「基礎的な（リズムをよむ、音符をよむ）ことを小さいうちから細く長く続けていかないといけない」（小・主・11-15）であろう。授業時数がより少なくなる高学年での個人差拡大の問題が指摘されており、一方では高学年で合奏活動が多く取り組まれている。高学年での合奏活動を充実したものとするには、1年生からの繰り返しの継続的な読譜指導がどうしても必要であると考えられる。また継続的な積み上げにおいては、次の意見のように各学年間の連携も重要である。「その学年で押さえておくべきことをしっかり定着させた上で、感性豊かな表現ができるように支援していきたいです。低学年ではリズムを中心に、中学年では、旋律、高学年では和声（和音）を！そのためには、1年生から音符等を確実に覚えられるようにしていくべきだと思います。私は音楽主任でもありますので、学年間では『これだけは確実に』という基礎基本を共通理解のもと指導してもらえるよう声をかけていきます。全校音楽のなかでも広めていきます」（小・主・21-25）。

また、「学校行事の中で（たとえば学芸発表会のようなもの）器楽に取り組むなど、音楽の授業の中のみでなく、子どもたちが自主的に練習し発表するような機会を設けたりすることも大切」（小・主・21-25）である。そして「学校行事や対外的行事で音楽を用いることになると、器楽の出番があるが、学級担任だけで抱えるのは、とても大変なことだ。段階的にでも専科制または教科担任制が増えれば、器楽合奏にも取り組みやすくなる」（小・専・6-10）とあるように、発表の機会は音楽専科の教員と学級担任など複数教員の協力によって実現しやすくなると考えられる。本調査における山梨県の音楽専科をおいている割合は、9.4%（96校中9校）で、全国調査の47.0%（185校中87校）と比べて非常に少ない。山梨県での音楽専科教員配置の増加が期待される。

中学校になると、小学校低学年から積み上げられてきた合奏活動や高学年から増え始めた複数楽器によるアンサンブル活動が、極端に少なくなることが問4で明らかになった。しかし、読譜の問題を抱えながらも、合奏を通して生徒達に表現のよろこびを経験させる努力がなされている。「私にとっては、まず音楽を好きにさせることが最大の課題です。授業で打楽器から取り入れているのも、楽譜が読めない彼らには一番馴染める楽器だからです。ただ昨年2学年の生徒たちに合奏を取り入れたところ、非常によくがんばりました。今後も決められた授業数の中で『よろこび』を感じられる機会をなるべく多く作りたいと思っています」（中・主・5下）。

中学校での合奏やアンサンブル活動の減少には、これまで見てきた通り様々な要因が絡んでいるが、小学校1年から中学3年までの継続的な読譜指導のあり方を検討することは、急務であると考えられる。

2. 和楽器の実技の取り入れ方

和楽器の実技に関しては、小学校では太鼓、中学校では箏が多いというのが、問1の楽器の所有・利用率や問6から明らかになった。小学校において和楽器の実技が一番多く取り入れられている学年は5年生で、その活動内容のほとんどが「おはやしづくり」である。山梨県下の小学校で多く使用されている教育芸術社の5年生の教科書には太鼓のリズムと笛のふしをつくって、太鼓をリコーダーで合わせて演奏する例が示されている。また4年生で《こきりこぶし》という回答が複数あったが、教育芸術社の4年生の教科書には、《こきりこぶし》の歌唱に和太鼓を含めた打楽器でリズム伴奏する内容が掲載されている。このように、教科書に沿って小学校では和太鼓が取り入れられている学校が多いのであるが、中学校になると和太鼓はあまり取り上げられなくなり、箏の実技に移行する。中学校での箏は、1年で多く扱われているが、上学年になるにつれ減少している。和楽器の指導には、楽器購入や所有台数、保管場所、メンテナンス等様々な問題が関わってくるが、前述の合奏・アンサンブルや読譜の活動と同様に、小学校から中学校への連携がない。義務教育段階にスポット的に様々な経験をさせるのも大事であるが、継続して積み重ねていくことも重要であると考えられる。中学校の和楽器実技は3年間継続することが示されているが、現状では継続されている割合は少ない。村尾（2010, p. 69）は、和楽器では、独

立した器楽合奏はまれで、唄の伴奏としての合奏が主であり、伝統的な感性を養うことを目的とするならば、そのことに対する注意が必要であることを述べている。問4の「多く取り組む活動」で、中学校ではあまり行われていないと考え「楽器と歌の合奏」の項目を省いたが、「和楽器と唄の合奏」という視点で和楽器を取り入れていけば、より和楽器を継続的に用いることができ、小・中学校連携の指導も可能になるのではないだろうか。しかし「和楽器導入にあたって、まず自ら様々な楽器の演奏ができるように（生徒に指導できるところまで最低習得するために）個人的におけいこに行ったり、研修に参加したり、時間とお金を費やした。学生時代は西洋音楽のみの勉強だったので苦労した。現在は、日本のうた（民謡等）の発声指導が悩みである」（中・主・26上）というように、音楽教師の負担は大きい。より充実した研修制度や外部講師の導入が必要になるであろう。

3. 工夫に関する問題

問8の効果的な教材では、リズムアレンジや楽器の組み合わせなど、児童・生徒が何らかの工夫ができることを理由として挙げているものが多かった。「既成の曲を仕上げるような形から、自分たちでつくり上げるような形に変化してきているように感じます」（小・主・16-20）のように、平成元年の学習指導要領で新学力観が示されて以降、児童・生徒の「創造性」重視の下に、「自分たちでつくり上げる」ことが目指され、音楽科の評価の観点にも「音楽的な感受や表現の工夫」が示され、何らかの工夫をさせることが重視されてきているように感じる。この方向性自体は重要であるが、授業時数が少ない中では難しい部分もあると考える。「リズムアレンジをする活動が多くなった。使う楽器の幅が広がった。楽器の奏法をきちんと指導することが少なくなりました」（小・主・26上）という意見もあった。「ただ吹けた（曲になった）らよいという授業ではなくなった」（中・主・11-15）のは、ある意味とても高度なことを要求されているとも言える。まずはその楽器を充実した音で鳴らすことができ、楽譜に書かれた音楽を再現できることが第一段階であり、その上に表現の工夫があると言える。正確でなくても「こう演奏したい」という工夫を重視する考え方もあるだろうが、やはり「できた」という達成感、一通り正確に演奏できるようになった時点でまず味わえるものであり、そのような体験も重要である。また過度な表現の工夫は、その音楽本来の良さが失われてしまうことにもなりかねない。「何らかの表現の工夫をさせなくてはいけない」と感じさせる傾向は、今後何らかの検討が必要ではないだろうか。

4. 教材

「児童の個人差があるので複数の楽器を使うときには、難易度の高い楽器をする子どもが片寄ってしまう。そのような時には、楽譜の難度を易しくして与えるようにし、いろいろな子どもが様々な楽器に挑戦できるようにさせているが、なかなか時間や手間がかかる」（小・主・21-25）、「リコーダー合奏（S、A、T、B、GB）を発表するのが恒例となっている為、取り組みはスムーズに行われている。ただ、生徒に合った曲（好みや難度）がないので編曲している。教材として曲が豊富にあったら良いと思う」（中・他・6-10）のように、児童・生徒の実情に合わせて教材をアレンジしなくてはならない現状がある。様々な状況に応じて使い分けられるように多様な教材があれば、合奏やアンサンブル、また器楽活動自体が現在よりは取り入れ安くなるのではないかと考える。

「器楽教育の過去・現在・未来」を語る座談会（村尾他, 2010, p. 63-72）では、教材の様式とアレンジについて、子ども用、教育用として音楽的でないものがあることについて語られている。そしてその楽器に最もふさわしい曲を並べるだけで子どもたちが上達していくという柳生（1978, p. 33-39）の「楽曲自体の指導力」についても述べられている。しかし「楽曲自体の指導力」を認めつつも「未熟な技能の子どもでも楽しめるようなアンサンブルの教材の開発を望みたい。曲のレベルに合わせて、子どもが高まっていくことも必要だが、質の高い曲が子どものレベルまでおりてきてくれることで、子どもは意欲

的に継続して音楽に関わっていける」（小・主・21-25）という意見もある。問8の効果的な教材では「取り組みやすい」という観点から多くの楽曲が挙げられていた。「時数の削減や他活動などで、児童自身の学校での時間が多忙で充分満足のいく演奏を仕上げるゆとりがない」（小・他・21-25）状況が、「楽曲自体の指導力」による指導を妨げているのである。各楽器の専門家によって、楽器本来の楽曲で難易度が考慮された教材が多く作られるのが望まれる。

5. おわりに

授業時数削減による器楽教育の様々な問題や困難、特に中学校の危機的な状況からは、これ以上様々な指導を強いるような声援はできないと何度も考えた。しかし「生徒は器楽には大変興味を持っています」「歌唱という表現は苦手であっても、楽器を通して表現できる子もいる」などの子どもたちの様子や先生方が努力されている内容の回答からは、やはり諦めてはいけなさと考えた。問題は大きいですが、個人として教員養成の立場からできることに努めたい。大学生でも読譜が困難な学生がいるが、彼らの多くはリズムが取れないことによる場合が多い。音の高低は五線譜を数えて理解できるのであるが、音の長短は1音ずつでは理解していても、その組み合わせからなるリズムを再現できないのである。まずは、この問題の克服を目指す中で、どのように低学年から無理なく継続して読譜指導をくみ込んでいくかについて考えていきたい。また、柳生（1978, p. 9）は、「指導に先立って、指導者自身の音楽的感動や喜びが基礎にある」としている。これまでも授業の中で、リコーダー四重奏をはじめ様々な生演奏を聴いてもらうことを取り入れてきたが、学生自らが音楽の良さや器楽活動の楽しさを感じ、子ども達に伝えられるよう、今後も尽力したいと考えている。

なお、付録として自由記述欄の記載内容を全文掲載する。今回取り上げることができなかった課題等、先生方の声を基にして今後も考察を深めていきたい。

お忙しい中、本調査に回答いただいた先生方に衷心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 有本真紀・根本愛子・小島千か（2010）「義務教育段階の器楽教育に関する調査」『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 7 no. 2, pp. 48-62.
- 2) 村尾忠廣・徳田崇・小熊利明・有本真紀（2010）「座談会『器楽教育の過去・現在・未来』を語る」『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 7 no. 2, pp. 63-72.
- 3) 柳生力（1978）『学級におけるリコーダー指導の研究』音楽之友社

付録：自由記述

数字は整理番号で、括弧内に主任・専科・管理職・その他の別（主・専・管・他と略）、教職経験年数（5年以下は5下、26年以上は26上、その他は該当区分の数字）を記す。

問9 器楽の指導にあたって感じる困難や問題

〈小学校〉

- 3、（主・5下）・やらせてみたい合奏教材があっても、授業時数内でできるものをと考えると、少しシンプル（易しく）にすることが必要。・ピアノは歌口ホースのみ個人持ちで、楽器は共同使用なので、家庭練習がさせられない。・器用さ、経験などによる個人差が大きい。
- 4、（主・21-25）音楽の時間数が少ないことで、楽譜（音符）を読む指導をする時間もなかなかとれない。
- 6、（専・6-10）欲しいと思う楽器が備品要求でなかなか通らない。
- 8、（主・11-15）音楽の授業が少なく、十分な指導ができない。また児童の個人差も大きい（個人レッスンを受けている子、そうでない子がいる）。
- 9、（主・16-20）本校は少人数でもあるので、特に問題に感じる点はない。
- 11、（主・6-10）音楽室の広さ（人数に対してせまい）。・個人差が大きく、なかなか合奏というかたちにするのがむずかしい。

- 14、(主・6-10) 高学年になると個人差が大きく、同じ楽譜を用意しても仕上がりに時間のかかり具合が大きく違ってきます。容易なもの(パート)とむずかしいもの(パート)を選べるように工夫しています。
- 19、(主・6-10) まず、一斉指導をし、そのあと個別指導をして対応しているが、授業内で同じように技能を身に付けることが難しく、休み時間に指導することもあります。
- 21、(主・5下) 良い楽器を使って良い音を体験させたいが、現在の備品をみるとそうはいかない。備品要求を出してもなかなか通らない。
- 22、(主・11-15) 指導、支援する教師が、人によって技能に(教える)差が大きい。専科の教師がいればそれも解消できるのだろうが。中学校とはちがって、専門的知識がない教師の方が多いので。
- 24、(主・21-25) パートに分かれた場合、教師一人では指導しきれない。
- 25、(主・26上) 個人差が大きく、グループへの指導が一人では難しい。リコーダー等の技能差がなかなかうまらぬ。楽器の準備・片付けに時間がかかる。
- 27、(主・21-25) 音楽の授業時数が少ないため、練習しても数日たつてまた復習からということが多い。・児童数の減少で1クラス10人以下となるクラスが多く、合奏のあつみが出ない。
- 29、(主・5下) 複式で授業を進めているため、もう少し授業数が多い方が十分な指導ができると思います。
- 31、(主・5下) 合奏曲を完成させるのに十分な授業時数がありません。
- 32、(主・16-20) 個人差のある子どもたちに教師1人で対応していくのは難しい。
- 36、(主・6-10) ・ピアノをやっている子、楽譜が読める子とそれができない子の差がある。・リズム打ちをしても、なかなかリズムを合わせることができず、指導に時間がかかってしまう。・限られた数の楽器なので全員が体験したり、練習したりすることが難しい。
- 38、(主・11-15) 児童全員に楽器がいきわたれば、スムーズにいくのに…と思うことが多いです。また技能がない児童はあきて遊びに走ってしまいます。
- 39、(主・16-20) ・演奏できるようになるまで、十分時間をとってやることができない。・音が鳴る程度で終わりにするしかなく、その上で音楽作りを楽しんだり、互いの演奏を聴き合ったりする活動を仕組む時間がとれない。
- 40、(主・16-20) どうしても児童の技能に個人差があるので、複数の楽器を使うときは、難度の高い楽器をする子が片寄ってしまう。そのような時には、楽器の難度を易くして与えるようにし、いろいろな子どもが様々な楽器に挑戦できるようにさせているが、なかなか時間や手間がかかる。
- 41、(主・6-10) ・備品は、特に和楽器が少ない。・限られた時間の中で基礎をしっかりおさえなければならず、個別指導が必要である。(鍵盤ハーモニカはピアノを習っている児童はよいが、初めての児童は指づかいなど正しくひくことが難しい。)
- 45、(主・16-20) ラテン楽器がないこと。教師がかつて小学校で習ってきた楽器以外は、指導する教員にとっても未経験のことがあり、指導が困難である。
- 46、(主・11-15) ・たまに使うような楽器は、「たたきたい!!」という気持ちが強く、やたらに使いたがってしまう。・楽譜が読めないで、グループではなすことができない。一斉でないといけない。
- 54、(主・16-20) 3年生からリコーダー指導が入ってくるが、個人差が大きく、高学年になるとなかなか合わせるのに時間がかかってしまう。また、音楽科の授業数も少ないため、うまく演奏できない子、楽譜の読めない子に時間をとることができず、合奏を楽しむまでいかないことがある。
- 57、(主・21-25) ・技能の個人差を補うだけの時数がない。・楽器を楽しむための最低限必要な技術や知識を身につけさせる時間がとれない(リコーダーならタンギングや読譜力など)。いわゆる基礎・基本を全員に身につけさせるための時間は、授業内だけでは無理がある。教師の裁量で、ある程度楽器に時間をかけて取りくむと同時に、家庭学習や合同音楽を取り入れ、子ども達の意欲を高めている。
- 58、(主・21-25) 音楽専科の教員がないので、指導する担任自身が技術、指導法の習得をしなければならず、難しさを感じる。特に高学年においては、専科の教員配置を望む。
- 59、(主・11-15) ・家庭での練習、休み時間や放課後の時間が行事・会議等で確保できない。・少人数校なので、人材が基本的に不足している。
- 60、(主・21-25) リズム感や器用さに個人差があり、繰り返し練習するも、はっきり皆に分かってしまう点では、表現に臆する児童が出てしまうので配慮が必要と感じている。
- 61、(主・21-25) ・器楽の技能の個人差に対応するには、グループや個別の指導が必要となるが、一人一人やグループに時間をかけると手がまわらず、全員に十分活動ができない。・全員に同じ楽器を使い経験させているが、個人差が大きく、技能を身につけさせるのに時間をとられる。
- 63、(主・26上) ・演奏を楽しんだり味わったりするには、ある程度の技術が伴わなくてはならないが、十分に技能を高めるだけの時間がない。・発達障害を持つ子どもの中には、どんなに努力してもなかなか演奏技術が向上しない子がいる。そのような子たちは、次第に意欲を失っていくので、指導の工夫が必要である。
- 64、(主・6-10) 感性を育む音楽の時間数が少ないのは、活動の幅を広げられない大きな課題であると思われる。個人差や楽譜が読めない等は、授業時数があればなんなくカバーできると思われる。

- 65、(主・21-25) 学年ごとに、その時習得すべきことができないまま次の学年になっている場合があり、全員が一斉指導で合奏することがやや難しくなっています。特に小学校の場合、主に学級担任が指導しているため、クラス間の差が出る場合があります(読譜やリズム打ち等)。基本的なことの上に、その子の表現の工夫が出せると思うのです。
- 66、(他・26上)・歌唱・器楽の指導を充実させるには、もう少し時数がほしい。・高学年での合奏は、パート練習させるのに指導者が一人では指導しきれない。又、その練習時間が十分に取れない。・リコーダーでは、指の器用さ、又、意欲などに個人差を感じる。
- 67、(主・16-20) 限られた時数の中で、十分な取り組みがなかなかできない。また、1人の担当で、個別、グループ別に指導していくためには、場所、時間等の保障が十分でない。よって、個別指導が満足に行うことができない。
- 68、(他・6-10) 階名で歌うことはできても、指づかいやタンギングなど、注意しなければならないことが多く難しい。リズムに合わせるのが難しい児童もいる。
- 71、(主・26上)・音楽科の時数が少ないため、じっくり取り組めない(特に高学年)。・鍵盤ハーモニカ、リコーダーなど、児童の技能にどうしても個人差が出てしまいます。その子に対してじっくり取り組む時間がありません。
- 72、(主・11-15) 難しいと思ったり、根気が必要になったりすると態度が悪くなったり、練習が続かなかったりする子が目立つので、励ましていきたい。
- 73、(主・21-25)・鍵盤ハーモニカは、ピアノを習っていて指が5本ですぐ弾ける子と、指先が未発達で動かない子がいる。・リズム感がある子とない子がいる(打楽器)。・パートのある曲に取り組むと、パートごとにメロディが違うので、それぞれを指導しなければならないので、なかなか曲にならない。
- 75、(主・21-25)・楽器が高価。・合奏の時、楽器の種類が多くなると一人の指導者では十分な指導ができない。・リズムをとることができない。・曲を完成させるための十分な時間がとれない。
- 76、(主・21-25)・時間割で、学年で同じ時間に音楽をしているので、楽器使用の時数が少なくなってしまう。・もう少し時間があると、いろいろな楽器に触れさせることができると思う。
- 79、(主・21-25) 器楽の活動は児童が好きであるが、一人の教師が多くの楽器の指導を短時間で行うことが難しく、残念である。
- 80、(主・21-25) 学年ごとに“どこまで”という線が守られていないと感じる。
- 81、(主・26上)・授業時間内だけでは技能の習得が図れないことがある。・時間にゆとりがなく、なかなか取り組めない現実がある。・指づかいやリズム指導に個人差がある。
- 82、(主・26上) 音楽科の総授業時数が少ないため、器楽の指導がしにくい状況にある。どうしても器楽は、時数が必要であるので、曲目も限られてくると思われる。
- 84、(主・21-25) 楽器が少なく全員に1回ずつやらせてあげるには、同じ曲ばかり何回も演奏しなくてはならない。しかも時間はかかっても「ちょっとさわった」程度になってしまう。
- 86、(主・26上) 練習場所が少ないので、周りの音がにぎやかになりすぎてしまう。
- 88、(主・16-20) 新しい曲の場合は、音とりができるようになるまでに時間も要し、習い事等の関係で個人差も大きい(低学年の場合、保・幼稚園での経験でも差が大きい)。合唱、歌唱のように、朝の会の中に毎日くみ込める(準備の時間がいらず…)と、くり返しの積み上げがきくが、器楽となると(リコーダーは別ですが)同じ様にはいかず、練習のための十分な時間がとれない。
- 91、(主・16-20)・個人への指導が必然的に多くなるため、時間がかかってしまう。・音楽に関して専門的な知識・技術を持っているわけではないので、指導上の悩みも多い。
- 92、(他・16-20)・個人差:低学年は、あまり見られない(大きくない)が、高学年になるほど差がでる。・楽譜を読むことができるまで指導する時間がない。
- 93、(主・21-25)・一つ一つの楽器の仕方の指導に時間がとられる。・一つ一つの楽器の準備に時間がとられる。・一つ一つの楽器のメンテナンスに時間がとられることもままある。
- 94、(主・6-10) 器楽合奏は子どもも取り組むことが好きで、やりたいと思うが、練習に時間がかかり、個人の技能に関係する部分が大きいため難しい。
- 96、(管・26上) 器楽指導において、個人の技能を身につけることと共に、特に高学年では、合奏を経験する中で、音楽に対する興味・関心をもっていく児童が一人でも多く出てほしい。歌唱という表現は苦手であっても、器楽を通して表現できる子もいる。しかし、時間が足りないのが悩み。

(中学校)

- 1、(主・26上) 備品や小物の楽器がそろっていない事もあるし、授業時数が限られた中で創作も鑑賞もとなると器楽まで手がまわらない状況にある。
- 2、(主・5下) 気軽につかえる打楽器が少ない。
- 3、(主・21-25) 1つの内容を充分時間をかけて表現したり感受する気持ちを育てることがむずかしい。
- 4、(主・11-15) 一人に一台ないと指導が難しい。

- 6、(主・26上) 週1時間程の授業ですが、あらゆる領域となると、器楽だけの授業を確保するのは困難である。表現に結びつけるまでに時間がかかったり、スペースや備品楽器不足もある。
- 7、(他・6-11)・和楽器は、地域の伝統芸能に生徒が関わっているの、購入がない。・全校で合奏の発表を行っているが(学祭・地区音楽祭)、全校練習の時間が限られている。・出来る出来ないより、やろうとする気がある・無しの差が大きい。個人プレーより全員で1つの曲を作り上げるので、その真剣さの違いが全体の雰囲気に影響する。
- 8、(主・26上) 一人1台楽器を持っての学習が理想であるが、現状2人で一台使用できるよう毎年計画的に購入している(箏、三味線)。また和太鼓を取り入れたいが、楽器が高額のためなかなか購入できない。
- 9、(主・6-10) 生徒の興味・関心の差が大きい。
- 10、(主・21-25) 備品の種類や数は豊富な方がよいが、高額なものも多く難しい(本校は生徒数が少ない→減少しているので現在はあまり困っていない)。読譜力に差が大きいことは器楽に限らず指導上の大きな課題。指導には小・中の連携も重要だと思う。
- 11、(主・21-25) 授業数が少ない中でやらなければならないことがたくさんあり、常時楽器の活動を入れることはできない。各学年、年に1~7時間まとめて授業を行っている。また、音楽の場合、合唱活動などや行事とタイアップしている面もあるので、器楽の時間を確保することは難しい。
- 14、(他・26上) 週1時間~多くて2時間の授業の中で、継続的な練習が必要な器楽を学ばせるのはむずかしい面が多い。選択音楽では人数も少ないし、興味のある生徒の集まりなので、練習もはかどる気はしている。本校は少人数の学校なので、器楽に触れる機会は多くとれている方だと思うが、大人数のところは大変だと思う。箏の場合、調弦等準備も労力がある。生徒に調弦をすることのできるものがあるとよい。教えていけばよいのだが。
- 15、(主・26上) 歌唱に時間がかかってしまい、なかなか教える時間がない。また行事の発表の場は合唱なので、そんな点からも時間がなくなってしまっているのが現状です。
- 16、(主・21-25) 和楽器は高価でかつメンテナンスにも費用がかかり、特殊な技術が必要。授業時数が全く足りない。
- 17、(主・11-15) やはり時間が少なすぎですね。生徒は、器楽には大変興味を持っています。しかし実際にやると壁にぶつかり、できないまま終わる。そうすると、好きになるところまでいかないようです。
- 18、(主・6-10) 何よりも設備の面で厳しい。
- 19、(主・26上) 1クラスの人数が多い(1人で教えるには)。教師の専門性を高める時間が欲しい。楽器を演奏するには技術の習得に時間がかかるし、1種類ではない。自分の技術が中途半端である。不安。または、外部講師を多く導入できるシステムと費用がほしい。
- 20、(主・21-25) 授業時数にくらべ、指導するための楽器の準備や譜読みなどに多くの時間がさかれてしまう。
- 23、(主・5下) 年間の授業数は明らかに少ないし、小学校での音楽教育がどういことを身につけさせようと思われてきたのか、理解に苦しむことがあります。まず、楽譜は全く読めません。歌もほとんど歌えないという状態で中学では合唱に追われ、小規模学校だから皆で歌えるようになるまでは細かい指導ができて、楽譜が読めない分、耳で聞いて覚えるような状況です。器楽も「よろこび」を経験するにはほど遠く、とにかく「さわらせる」のが精一杯です。文科省が授業に求める内容と授業数の割合が合いません。
- 26、(主・6-10) 個人差があるため手がまわらない。じっくり指導する時間がない。
- 27、(主・16-20) 予算がすくなくないので、満足に使う数、箏がそろっていない。少しずつ購入してもらえるように要求はしている。

問10 今後についての考え・展望

(小学校)

- 2、(主・5下) 楽器を教える技能を教師自身が学びたい。
- 3、(主・5下) 技術の指導に終わらず、表現のためのテクニックととらえて、いろいろな方面からの指導(リズム、運指、和音など…)が必要と考えています。
- 6、(専・6-10) 今後こうなってほしいこと：全国的に専科で音楽を教えている状況はまだまだ少ない。一方、学校行事や対外的行事で音楽を用いることになると、器楽の出番があるが、学級担任だけで抱えるのは、とても大変なことだ。段階的にでも専科制または教科担任制が増えていけば、器楽合奏にも取り組みやすくなると思う。
- 7、(主・16-20) 年に1曲は合奏曲に取り組み、曲を作り上げたい。
- 8、(主・11-15) 器楽の楽しさを味わえるような授業の展開をしたい。
- 12、(他・26上) 複数教員が授業を行う(色々なパートに対応するため)→教職員の加配が絶対に必要です！！
- 18、(主・21-25) 音楽づくりに結び付ける授業を考えている。和楽器にふれさせたいが、お金がなく買えない。
- 20、(主・26上) 音楽室の環境を整え、使いやすくする。音楽の授業時数を確保していきたい。学年や学校単位での音楽発表会など計画していく。
- 21、(主・5下) 器楽の分野においても表現を自分たちで考える活動を取り入れたい。その際、ある程度楽曲を仕上

- げてからでない」と取り組めない。器楽の時数をもっと増やしてほしい。
- 27、(主・21-25) 学校行事の中で(たとえば学芸発表会のようなもの)器楽に取り組むなど、音楽の授業の中のみでなく、子どもたちが自主的に練習し発表するような機会を設けたりすることも大切だと思います。
- 30、(主・21-25) 小規模校なので、全校音楽のとりくみを考えていく。
- 35、(主・16-20) 音楽の時数を増やしてほしい。
- 36、(主・6-10) リズムにのって体を動かしたり、体をたたいてみるなど体をつかった活動から器楽の授業へと展開させたい。リコーダーアンサンブルで難しい曲(完成した時満足できるような曲)をやってみたい。時間が確保できるのであれば、合奏を多くやりたい。
- 37、(主・16-20) 音楽科の総授業時数をもう少し増やす(不可能なことです)ことにより、器楽や歌唱に余裕をもって取り組めると思う。表現活動として、歌唱と器楽を合わせた教材を各学年1曲はとりくむようにする。
- 38、(主・11-15) できる、できないにかかわらず、身近なリコーダーやピアノは好きになってほしいと思っています。
- 39、(主・16-20) 和楽器を多くの子どもに体験させたい。(その為には、楽器を揃える必要があるが、予算的に困難)
- 40、(主・16-20) 自分たちがイメージを広げ、音づくりをして、器楽演奏ができるような授業をつくっていきたくて考えています。
- 43、(管・26上) 生でよい演奏を聞くこと。楽器が手に入り、専門の指導員がいること。
- 44、(主・16-20) 音楽の授業時数の確保。
- 46、(主・11-15) 音楽の時数の少ない中で、どう練習していくか。基礎的な(リズムをよむ、音符をよむ)ことを小さいうちから細く長く続けていかないといけないと思う。
- 47、(主・21-25) 鑑賞とのかかわりを大切にする。グループ学習など、時間がとれない場合も中休み等、音楽室を多くの学年で活用する。
- 48、(主・21-25) 時間的に厳しいが、1年間で、ひとつの単元として数時間をグループでの器楽合奏に当てている。時間がかかったり、個人差も大きいですが、楽しい授業になる。今後でも取り入れていきたい。
- 53、(主・26上) 選曲が大切なので、曲の難易度や音の高低、リズム等、児童のレベルに応じた曲をできるだけ多く収集しておいて、授業に使っていききたい。
- 54、(主・16-20) 音符になじんで、自分でリズムと階名読みができるようにしたい。
- 55、(主・26上) いろいろな楽器を通して、音楽を楽しむことのできる時間的ゆとりがまず必要だと思う。
- 57、(主・21-25) ・個人差に対応し、器楽表現の楽しさやおもしろさが味わえるような教材(曲)を教科書にのせたらどうか。合奏曲では、技能の高い子向けのパートと初心者レベルのパートを用意し、選べるようにすると良い。・未熟な技能の子でも楽しめるようなアンサンブルの教材の開発を望みたい。曲のレベルに合わせて、子どもが高まっていくことも必要だが、質の高い曲が子どものレベルまでおりにてくれることで、子どもは意欲的に継続して音楽に関わっていけると思う。
- 59、(主・11-15) 本校は運動会の全校鼓笛行進や、地区の音楽祭への出場(3、4年)等があるので、かなり器楽の時間を取っていると思う。音楽科の指導内容とマッチするような形をとってあげたいと思う。
- 61、(主・21-25) ・音楽が苦手と感じる児童も楽しさを味わえるような教材を選んでいきたい。・TTなど複数で指導に当たることが望ましい。
- 63、(主・26上) ・個人的には、生涯学習としての音楽を目指したいので、楽しめる音楽、癒される音楽を授業に取り入れ、卒業しても長く音楽に親しむ素地をつくりたい。・本校では中学年以降は、器楽の授業がリコーダー中心になるが、ラテン楽器や鍵盤打楽器、和太鼓など、学校にいるからこそ触れることができる楽器をふんだんに取り入れたい。
- 64、(主・6-10) 子どもたちがやってみよう曲、流行している曲などを取り入れてみることなど。
- 65、(主・21-25) その学年で押さえておくべきことをしっかり定着させた上で、感性豊かな表現ができるように支援していきたいです。低学年ではリズムを中心に、中学年では、旋律、高学年では和声(和音)を! そのためには、1年生から音符等を確実に覚えられるようにしていくべきだと思います。私は音楽主任でもありますので、学年間では「これだけは確実に」という基礎基本を共通理解のもと指導してもらえよう声をかけていきます。全校音楽のなかでも広めていきます。
- 66、(他・26上) ・和太鼓等をそろえ、地域に伝承されている(ドンド焼き、お祭等)のリズムを教わり、受け継いでいきたい。・リコーダーでは簡単だけれども、聴きごたえのあるような合奏曲などを探し、子ども達の意欲を伸ばしていきたい。・限られた時間ですが、子どもが興味・関心をもって取り組める教材をさらに学んでいくことが自分にとって大切だと考えている。
- 67、(主・16-20) 歌唱とちがいが、場の設定に工夫が必要となる。又、一人一人にいきわたるだけの楽器を備えていなくてはならない。時間・場所・人・物などの環境をさらに整えていきたい。
- 68、(他・6-10) 様々な楽器に触れさせ、特徴や音色を感じさせたい。
- 71、(主・26上) クラスでの合奏にじっくり取り組むたい。

- 72、(主・11-15) (打楽器を中心とした) リズムのアンサンブルをして合奏の楽しさを味わいたい。歌うこと(表現すること)の楽しさを味わわせたい。
- 73、(主・21-25) 器楽をやる時に複数指導者で指導して早く曲合わせができるようにして、合わせることの楽しさを味わわせたい。
- 75、(主・21-25) プロの奏者がボランティアで演奏指導に来てくれること。様々な楽器に触れさせたい。使用頻度の高い楽器については基本的な奏法をしっかりと身につけさせたい。
- 76、(主・21-25) ・子どもたちが苦手意識を持たずに楽しく心を軽くできるような授業ができればいいと思う。そのための教師自身の力をつけたい。・難しい曲でなく、楽しさが味わえる活動をしくんでいきたい。
- 79、(主・21-25) 和楽への興味を持たせ、楽器の演奏を行うこと。
- 80、(主・21-25) 各学年ごとにしっかり一定のところまでは教えていくことを徹底する。
- 81、(主・26 上) ・よりきめ細やかな指導をするためにT.Tなどの指導体勢がとれるとよい。・教師自身も教材研究をしたり、講習会に参加する努力をする。・専門の知識・技能をもった講師の先生などに授業をしていただく。・いろいろな楽器をつかったアンサンブルに挑戦したい。
- 83、(主・21-25) 時間の確保をし、より多くの楽器に親しませたい。
- 88、(主・16-20) 今の子どもたちは耳も良く、感受の力を伸ばしていく機会も多々ある中で、学校音楽から離れた(家へ帰ってから)ピアノを習ったりしていなくても、ある程度、自分で再現する(習ったものを…、あるいは聴いて感動したもの、好きになったものを…)力をつけさせてあげたいと思います。歌詞で感情を込めて歌うことももちろんですが、多くの曲をドレミで歌えるように日々積み重ね、すらすら口から出てくると、意欲的に器楽に向かうのではないかと考えます。
- 91、(主・16-20) 器楽に関しては、児童の技能に個人差がありがちなので、指導方法の工夫(機器等の活用、指導者の複数化、TT)が必要かもしれない。
- 93、(主・21-25) 音楽の時数が増え、内容がそれに比して少なくなると落ち着いて楽器に取り組みると思います。
- 94、(主・6-10) 児童が様々な楽器に触れる機会がたくさんあったらと感じる。

〈中学校〉

- 3、(主・21-25) 楽譜の読めない生徒も楽器を通して読譜の力がつけられることは、歌唱より実力がつけられる。
- 4、(主・11-15) 器楽と創作を関連づけた授業展開(旋律に合う伴奏を考えるなど)。
- 6、(主・26 上) 確実な時間がとれて計画通り進められること。学校の生活の中には、合唱活動が欠かせないので、歌唱教材を通して歌うことを中心にやっていたらいい。
- 7、(他・6-11) リコーダー合奏(S、A、T、B、GB)を発表するのが恒例となっている為、取り組みはスムーズに行われている。ただ、生徒に合った曲(好みや難度)がないので編曲している。教材として曲が豊富にあったら良いと思う。
- 8、(主・26 上) 技術科に協力いただいて、篠笛を各自作って演奏する学習が進められたらと考えてはいるが…
- 10、(主・21-25) 和楽器の指導はそれなりに意義がある(重要)だと考えているが、箏や三味線などは調弦などにたいへん時間がかかり、生徒も扱いづらい。太鼓類は高額である。本物が最も良いが、学校音楽用の工夫がもっとあってよいし、自身もこれに取り組んでいきたい。
- 11、(主・21-25) シンセサイザー等を使って、アンサンブルや創作活動に絡めて授業をしたいと考えている。
- 14、(他・26 以上) 久しぶりに学校の子どもたちを前にして、教師の工夫、努力の大切さを感じます。子どもたちの持つリズム感を生かして太鼓の合奏等をすると楽しいと思います。今までやってこなかったのですが、今から新しくやれるとすれば打楽器を使いたいように思います。
- 15、(主・26 以上) 本来アルトリコーダーを習わせたいのだが、買っても少ししか使わないことになるので、ソプラノリコーダーをそのまま使って学習している。上記のような理由から、授業時数が増えればと思います。
- 20、(主・21-25) 吹奏楽のように時間を充分にとれる対応が必要。たとえば、ある時期に集中してまとめどりをする。
- 23、(主・5 下) 私にとっては、まず音楽を好きにさせることが最大の課題です。授業で打楽器から取り入れているのも、楽譜が読めない彼らには一番馴染める楽器だからです。ただ昨年2学年の生徒たちに合奏を取り入れたところ、非常によくがんばりました。今後も決められた授業数の中で「よろこび」を感じられる機会をなるべく多く作りたいて思っております。
- 25、(主・26 上) 情操教育や心豊かになど、音楽科での役割をすべく時間がないため中途半端になってしまう。もっと音楽、広く美術などの教科は大切だと国でうったえないと器楽の授業はさらに難しい。
- 26、(主・6-10) T.T

問 11 10年以上前と比較しての変化

〈小学校〉

- 1、(他・21-25) 時数の削減や他活動などで、児童自身の学校での時間が多忙で充分満足のいく演奏を仕上げるゆ

- とりが無いのが悩みです。
- 3、(主・5下) 時数の削減に伴い合奏の機会が減った。
 - 4、(主・21-25) 音楽の時間数全体が減ったので、器楽の指導時間も減り、大曲に取り組みにくくなった。
 - 5、(主・21-25) 電子楽器がふえたと思います。使い方を熟知しておかないと効果的に使えません。
 - 7、(主・16-20) 和太鼓や箏(日本の伝統楽器)を使うことがふえた。外部講師をまねいて指導していただくこともある。
 - 8、(主・11-15) ソプラノリコーダーがバロックからジャーマンに変わり、ファの指づかいでつまずく子が少なくなった。
 - 12、(他・26上) 授業時数の減少にともなって器楽合奏に費やす時間が減り、満足のいく曲を仕上げることができなくなった。
 - 18、(主・21-25) アンサンブルオルガンで合奏したことがあったが、今は使っていない。
 - 20、(主・26上) 音楽の授業時数がへったため、なかなか器楽合奏(クラス全体での)に取り組む余裕がない。気軽に教室でもできるリコーダー奏が主になってしまっている(高学年)。
 - 22、(主・11-15) 電子オルガンなどの機能の発達でいくらか指導支援がしやすくなりました。
 - 27、(主・21-25) 山梨国体の時には、各学校とも楽器をそろえていただいて、マーチングなどに力を入れました。トリオのたいこなども取り入れていました。今はそのころにくらべると、マーチングなどのとりくみは減っていると感じています。
 - 28、(主・16-20) 音楽の時数が減っていること、発表会等の取り組みの簡素化などで、アコーディオン等を使った時間をかけて取り組む器楽合奏に取り組めなくなった。
 - 35、(主・16-20) 器楽の時間が少なくなった。
 - 37、(主・16-20) 和楽器への関心が高まり、自分自身も積極的に体験し、良さを子どもたちに伝えることができるようになった。
 - 39、(主・16-20) 奏法の指導のみでなく、「感受」や「鑑賞」も含め活動を仕組むことが求められるようになった。
 - 40、(主・16-20) 既成の曲を仕上げるような形から、自分たちでつくり上げるような形に変化してきているように感じます。
 - 41、(主・6-10) 個に応じた指導をより大事にしている。
 - 43、(管・26上) 時数がへってしまったことで、いろいろ取り組めなくなった。
 - 48、(主・21-25) 多様な楽器を使つての器楽合奏の機会が減った。時数減からきていると思う。
 - 51、(主・26上) 特に感じてはいません。要は指導者次第ですから…
 - 54、(主・16-20) 合奏の練習時間(個人練習)の時間が取れなくなったなと感じます。また、子どもも中休み、昼休みなど練習する子があまりいなくなったように思います。
 - 59、(主・11-15) 時数が減ったことはやはり、いろいろな活動の機会を児童からうばうことになったと思います。教員も忙しすぎて、教材の研究がじっくりできなくなりました。
 - 60、(主・21-25) 子どもの能力によって指導により工夫と配慮が必要となってきたと感じる。
 - 61、(主・21-25) 合奏に費やす時間がとれなくなった。学校行事で音楽行事が削減されているので、大規模な合奏に取り組ませられない。授業だけだと時数が充分とれない。授業以外の休み時間などを利用して個別練習につきあう時間が昔はあった。
 - 63、(主・26上) ピアノやエレクトーンを習っている子が増える一方、音楽は嫌い、苦手という子も増え、技術面での二極化が進んでいる。
 - 66、(他・26上) 授業時数が減り、一番削られたのが器楽の指導だと思います。学校教育の中の音楽で歌唱は行事等の関わりもあり、ある程度の時数は必要です。鑑賞も表現との関わりで重視されています。そうすると少ない時数の中で指導に時間のかかる器楽はどうしても少なくなってしまう。
 - 67、(主・16-20) 専科でないなど、多忙の中での取り組みとなり、他学年、他校との交流も少なくなっていると思う。もっと情報交換できるようになるといい。
 - 71、(主・26上) リズムアレンジをする活動が多くなった。使う楽器の幅が広がった。楽器の奏法をきちんと指導することが少なくなりました。
 - 73、(主・21-25) 保育園などでピアノや打楽器を経験してきているので、全体のレベルは上がっていると思う。
 - 75、(主・21-25) 音楽の授業時数が減り、子どもたちに達成感を十分に味わわせることが困難になってきている。音楽こそ表現力を高め感性をみがくための大切な教科であると思う。
 - 76、(主・21-25) 音楽の時数が減り、1つの曲にじっくり取り組むことが少なくなった。
 - 77、(主・21-25) 以前の方が、発表会などあり、いろいろな楽器に子どもがふれたように思う。(アコーディオン、ベルリラなど)
 - 79、(主・21-25) リコーダーで指を自由に動かせない児童が増えている。子どもたちが音楽を身近に感ずるようになってきている。リズム感も良くなっている。

- 80、(主・21-25) できることが減り、窮屈に感じる。
- 81、(主・26上) 講習会に参加していらっしゃる先生方の授業はおそらく時代とともに変化していると思う。
- 82、(主・26上) 教科書で器楽についてもいろいろな工夫があってありがたいと思う。10年以上前に比べて1曲をじっくり取り組むことができにくくなっている。
- 83、(主・21-25) 授業時数の変化によって影響を受ける。合唱する機会が行事の中では多く、そちらにウェイトがおかれる傾向がある。
- 87、(主・21-25) オルガンの機能がとても良くなってきたので、音色を変えたり、リズムを刻んだり授業の中で効果的に使えるようになった。
- 88、(主・16-20) 学校の規模や地域によっても変わるので比較できるかわからないのですが、以前の方が多くの楽器に触れる機会も多く、合奏も盛んに行われていました。
- 90、(主・16-20) 時数が少なくなり、練習時間が減ったため、大曲に取り組みづらくなった。
- 91、(主・16-20) 授業での取り扱い数が減ってきているように思う。(授業数の減少により、特に合奏に取り組むことが容易でない。)
- 93、(主・21-25) ・落ち着いてゆっくり取り組んでいられなくなったような感じを受けています。・合唱に時間をとられているというような感じも受けています。(ハモリ等上のレベルを求めているような…)
- 96、(管・26上) かつては合奏曲で楽器が指定されていたが、今では楽器の組み合わせを工夫したりするようになっている。子どもの創造性ひき出すことができる。

〈中学校〉

- 3、(主・21-25) 時間のゆとりがなく、深く内容を追求することがむずかしくなった。
- 6、(主・26上) 授業数があったころは、アルトリコーダーを持たせたりして器楽アンサンブルなどを楽しませる余裕がありました。
- 8、(主・26上) 和楽器導入にあたって、まず自ら様々な楽器の演奏ができるように(生徒に指導できるところまで最低習得するために)個人的においこに行ったり、研修に参加したり、時間とお金を費やした。学生時代は西洋音楽のみの勉強だったので苦労した。現在は、日本のうた(民謡等)の発声指導が悩みである。
- 10、(主・21-25) 生徒数の減少、厳しい予算の中にありながらも、楽器の種類、数は充実してきており、様々な楽曲やスタイルに取り組みやすくなったことは良い。反面、授業時数の削減が進み、限られた時間の中で多様な音楽に取り組むには、十分な時間が足りない。
- 11、(主・21-25) 以前はアルトリコーダーなどを個人で持たせていたが、継続して行う時間がないので、持たせられなくなった。
- 13、(主・26上) 週1なので、1曲みんなで仕上げで楽しむのに時間がかかる。
- 14、(他・26上) 以前はアルトリコーダーを個人にもたせ、授業で合奏もやりました。今は経済的な問題もあり、保護者も生徒も変わってきていてむずかしいようです。学校に備えている楽器で楽しく演奏させる工夫をしてくのがよいのかもしれない。
- 15、(主・26上) 全生徒に小太鼓のバチを買わせ、リズム感を身につけさせ、アルトリコーダーも買って授業を行ったこともあった。やはり、小学生とはちがう楽器を使って合奏することを生徒は望んでいるように思うので、時間があれば色々な楽器をやらせたいとは思っている。
- 17、(主・11-15) ただ吹けた(曲になった)らよいという授業ではなくなった点。
- 19、(主・26上) 主に使う楽器がギター→リコーダー→電子楽器→和楽器となっていて、色々導入されているが、それともなう予算などの事(その楽器を修理するための費用も含めて)があまり考えられていない。まだ使えるのもったいないものが多い。
- 20、(主・21-25) 授業時間が少なくなったこと。生徒の個々の技術と譜読みの問題が多くなってきたこと。
- 24、(主・26上) 時数が減りとてもやっていたらならない。
- 25、(主・26上) 音楽科の授業数が少ないのと、音楽の授業以外にも放課後など生徒を個人指導している時間もない。
- 27、(主・16-20) アルトリコーダーをする時間が減少した。私はやはりアルトリコーダーは使わせたいと思っている。総時間数が減り、和楽器が入ってきた現在、アルトリコーダーを保護者に購入していただくのも申し訳ない。本校では、これらのことも保護者に話し、理解していただいているので、とてもありがたいと思っている。
- 28、(主・21-25) 授業時数の減少により、どうしても歌唱に時間をとられ、取り組めないのが現実かもしれません。
- 29、(主・26上) 器楽は個人差が顕著に出る活動ですが、以前と比べ個人差があまり目立たなくなってきたことと、楽器に触れることが実生活の中で多くなってきていることが関係していると思われます。
- 32、(主・21-25) 授業数が減ってしまったので、十分な指導はできない気がします。